

農業の未来を賢治の地イーハトーブで語ろう

分科会一覧（1 日目） 於 岩手県雫石町 ホテル森の風・鶯宿

2 月 23 日（日） ●15：30～17：30 （座長、報告者 敬称略）

①有畜循環型農業の展望

東北・岩手の畜産の歩みは、牧野の利用と水田複合の二つを基盤とし、日本畜産の良質な伝統を形作ってきました。こうした歴史的特質を踏まえて、地域環境・資源を活かした草地型畜産と有畜複合経営にスポットを当て、有機・循環型農業の要としての畜産のあり方を考えます。

（座）中島紀一（茨城大学名誉教授）、吉塚公雄（山地酪農家・志ろがねの牧／岩手）、大塚一吉（養鶏を組み合わせた有機農家／群馬）、熊谷明夫（岩手中央農業同組合のしわ黒豚生産者の会会長）

②宮沢賢治と有機農業

宮澤賢治は詩人や童話作家として知られていますが、賢治の後半生は農業を中心とした社会変革の活動に力を注ぎました。賢治が試行錯誤しながら目指した農業の世界は、現在の私たちが目指す有機農業の世界と多くの点で共通すると思います。農業と生命をめぐる有機的な世界を描こうとした賢治の生き方に迫り、また、賢治童話の「語り」と「紙芝居」という手法によって、童話に内包された賢治の有機的思想を伝え広める試みを検討します。

（座）本城昇（埼玉大学名誉教授）、牛崎敏哉（宮沢賢治記念館副館長）、館野廣幸（有機農家、宮沢賢治セミナー主宰／栃木）、埼玉大学有機農業研究会／賢治作品の語りと紙芝居

③TPPと食・農・暮らし

TPP（環太平洋経済連携協定）は「強者の利益追求の自由」を進めるため規制撤廃を目的とする、危険な自由貿易協定です。この協定によってあらゆる分野に混乱と破壊が懸念され、とりわけ食の安全や国内農業が脅かさ

れ、地域経済の衰退が指摘されています。TPP の私たちへの影響を確認し、今後、安全な食料の生産と地域農業・社会を守り、生産者と消費者がどのように連携していくか、参加者全体で考える場にします。

（座）荻原武雄（いわて食・農ネット会長）、安田節子（食政策センタービジョン 21 代表）

④福島原発事故と有機農業の土の力

有機農業の土の力で放射能汚染を乗り越える道すがら、野中昌法教授らの福島現地調査研究からも見えてきました。原発事故から 3 年。有機農業の優位性を科学的に裏付け、復興への方向性を探ります。

（座）魚住道郎（魚住農園／茨城）、野中昌法（新潟大学農学部教授）、菅野正寿（福島県有機農業ネットワーク代表・有機農家）

⑤食文化としての岩手大豆を守る

古来より日本人の食の根幹として、大切に食べ継がれてきた大豆。味噌醤油はもちろん、岩手では雪国ならではの雪納豆・豆しとぎなどが、貴重なタンパク源として人々を支えてきました。食文化としても伝えたい一番の食材として、大豆の持つ貴重な意味をもう一度問い直し、岩手や日本における大豆の現状を探り、今後の展望につなげていきましょう。自給率 8%、減反の補助金廃止という危機的状況の中、全国各地の地大豆を守る視点で皆さんと話し合しましょう。

（座）横山英信（岩手大学教授）、角田信子（いわて生協常務理事）、島津勢津子（岩手有機農業研究会・管理栄養士）、高屋敷ヒズ子（岩手有機農業研究会・有機農家）、熊谷由紀子（生活クラブ岩手・専務理事）

分科会一覧（2日目）

2月24日（月） ●9：30～11：30 （座長、報告者 敬称略）

⑥脱原発を地域住民運動から考える

岩手には原発立地阻止の歴史があり、全国発の医療用放射性廃棄物処理工場（RMC）の反対運動も起こり、六ヶ所再処理ストップから脱原発の市民運動へとつながっています。原発事故の有機農業へのダメージは計り知れません。郷土や子どもたちを守り、脱原発社会を目指して語り合しましょう。

（座）中屋敷宏（弘前大学名誉教授、『原子力社会からの脱却』著者）、永田文夫（三陸の海を放射能から守る岩手の会）、島津勢津子（岩手有機農業研究会・クランボンの会）、大石光伸（常総生協副理事長／茨城）

⑦田畑から平和を

一歴史を振り返り、未来へ

特定秘密保護法案が強行成立させられた今、第2次世界大戦中の出来事が遠い過去のことではなくなってきました。当時、農村で何が起こり、農民たちはどのように戦争に動員されていったのでしょうか。千葉に残る戦争遺跡、岩手に残る軍事郵便から具体的に学び、現在起こっていることと併せて考えていきたいと思います。

（座）柳谷励子（岩手有機農業研究会・わらしべ農園）、高橋源英（北上平和記念展示館館長／岩手）、八木直樹（南房総・平和を作る会・やぎ農園／千葉）、加藤善正（平和憲法第9条を守る岩手の会・事務局／岩手）

⑧地域振興と有機農業の意義

有機農業の地域的展開ならびに地域おこし・六次産業型地域振興政策の現状を報告してもらうなかから、農家・団体・行政らがどのように連携していけるか、そこでの新しい動きと課題を検討します。震災からの復興と地

域の再生に向けて有機農業に関心を持つ者がどのように寄与していけるかを考えましょう。

（座）三須田善暢（岩手県立大学盛岡短期大学部准教授）、相澤潤一（しずくいし軽トラック市実行委員会実行委員長／岩手）、小島幸喜（大東町有機農産物等生産組合代表／岩手）

⑨出会う・つながる

一緒に学ぶ農と自給・環境

原発事故をきっかけに、有機農業の生産者と消費者のつながりは、単に「農産物の安全性」だけの追求ではもろいことが明らかになりました。これからは、持続的な地域づくりや、国内の食料自給や地域の環境、食と農の文化なども共に守っていくことをつながりの核に据えていくことが大事ではないでしょうか。田畑の上で農家に学び、共に学ぶあう姿勢を追求していきましょう。

（座）並木芳雄（並木農園／埼玉）、大内信一（二本松有機農業研究会代表／福島）、槌田劭（使い捨て時代を考える会／京都）、大野貞枝（兵庫食品公害を追放し安全な食べものを求める会／兵庫）、山口博文（山口農園・豊かな食べものを求める会／岩手）

⑩岩手から考える種（たね）の未来

「種がなければ、食べものも、人もいなくなる。」種子の自給は、大変ですが極めて重要です。とりわけ地元で継承された伝統品種、地方品種を掘り起こし、未来へつなげるにはどうしたらよいか、種の未来を考え、話し合しましょう。

（座）佐久間清和（佐久間自然農園／千葉）、岩崎政利（種の自然農園／長崎）、林 重孝（林農園／千葉）、塚原良子（スローフード岩手）